



駿府と今川氏

第23回

寿桂尼の死と武田信玄の駿府侵攻

死後も今川家を 守ろうとした寿桂尼

桶狭間の戦いのあと、今川領国の崩壊のカウントダウンが始まった。まず三河で、徳川家康が今川氏真から離れ、織田信長と清須同盟を結んで自立し始め、それに刺戟され、それまで今川家に付いていた家臣が同じように離脱していった。

誰の目にも今川家が落ち目になったと映るようになった永禄十一年（一五六八）三月二十四日、母親の正室、氏輝・義元の母で、また一時期は「駿府の尼御台」として、「女戦国大名」などと言われた寿桂尼が波瀾に満ちた生涯を閉じている。

彼女は亡くなる前、「わが死後、鬼門に葬られ、今川館を守護せん」と遺言したと言われている。その遺言によって建てられたのが、現在の葵区沓谷にある龍雲寺である。確かに、龍雲寺は駿府今川館の東北にあたっており、東北は艮（うしとら）と言って鬼門の方角にあたり、死んでなお、今川館を守ろうとした強い意思のあったことがうかがわれる。

武田軍に焼かれる 駿府今川館

徳川家康が三河で自立し、その勢いが遠江にまで波及しそうな様子を見て、焦りだしたのが甲斐の武田信玄である。信玄は、義元在世中「甲相駿三国同盟」を結んでいたが、ついに氏真と手を切り、家康と結んで、東西呼応して今川領に攻め込むことを考えていた。

しかし、さすがの信玄も、寿桂尼が生きている間に行動に移すことができなかつたものと見え、寿桂尼の死後だといふ経つたその年の十二月六日、甲斐の躑躅ヶ崎館を出陣し、十三日に駿府に攻め入っている。

このとき、信玄は「駿府今川館には火をかけるな」と命じていた。ところが、先陣を切つて今川館に突入した馬場美濃守信房は、その信玄の命令を無視し、片っ端から火をかけて回つた。この兵火で、今川館はもちろん、今川家の財宝すべてが灰燼に帰してしまつたのである。

戦いが一段落したあと、馬場信房は信玄に呼ばれ、命令違反をとがめられているが、信房の「火をかけな



▲駿府に攻め入った武田信玄 撮影：水野 茂
[山梨県笛吹市(旧・石和町)のイベント「川中島合戦戦国絵巻」より]

ければ、殿は今川の財宝欲しさに今川を攻めたと言われますよ」との一言で、命令違反は不問に付されたという。

氏真は駿府を脱出し、東海道を避けて山の中を通り、大井川を越えて掛川城に逃げ込んでいる。掛川城には重臣筆頭の朝比奈泰朝がいて、そこで再起を図ろうとしたのである。

しかし、その掛川城が徳川家康の軍勢によって包囲されることになり、籠城戦を展開する羽目に陥っているのである。